

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Repeated maternal non-responsiveness to baby's crying during postpartum and infant neuropsychological development: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

泣いている子どもに対する産後の母親の度重なる無反応と乳幼児期の神経心理学的発達との関連

ユニットセンター(UC)等名:愛知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:Child Abuse & Neglect

年:2022

DOI: 10.1016/j.chabu.2022.105581

筆頭著者名:松木 太郎

所属 UC 名:愛知ユニットセンター

目的:

産後のネグレクトに関連する行動、特に泣いている子どもに対する母親の度重なる無反応と乳幼児期における神経心理学的な発達軌跡との関連については十分に解明されていない。本研究では、産後 1 か月時点での母親のネグレクトに関連する行動と乳幼児期の神経心理学的発達との関連について検討することを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加する 100,286 名の子どもを対象とした。産後 1 か月時点において、母親が「赤ちゃんを家に一人で置いておく頻度」と「赤ちゃんが泣いたときに無視をする頻度」を説明変数、生後 6 か月、1 歳、1 歳半、2 歳、2 歳半、3 歳までの計 6 時点での子どもの神経心理学的発達(質問票 ASQ-3 のスコア)を従属変数とし、多重代入法による欠損値の補完を行った後、母親および子どもの基本属性などを調整し、ロジスティック回帰分析を行った。

結果:

産後 1 か月時点での「赤ちゃんが泣いたときに無視をする頻度」が「時々以上」のグループは、全く無視をしなかったグループに比較して、子どもが生後 6 か月時点から 3 歳時点まで一貫して「コミュニケーション」領域での発達遅延が多くみられた。また、他の ASQ-3 の領域(「粗大運動」「微細運動」「問題解決」「個人・社会」)においても、比較的長期にわたる発達遅延がみられた。一方で、「赤ちゃんを家に一人で置いておく頻度」が発達遅延に及ぼす影響は、1 歳までに多くの領域で消失した。

考察(研究の限界を含める):

本研究の結果から、「赤ちゃんが泣いたときに無視をする頻度」は、「赤ちゃんを家に一人で置いておく頻度」と比較して、子どもの神経心理学的発達の遅延との関連が乳幼児期において長期にわたることが示唆された。しかし一方で、「赤ちゃんが泣いたときに無視をする頻度」が「時々以上」であっても、「コミュニケーション」領域の発達遅延は年齢を経るにつれてその傾向が徐々に減少していくことから、子どもの発達の可塑性の高さが示唆された。ただし、ネグレクトに関連する行動の頻度や ASQ-3 に関しては、どちらも母親自身の主観的な回答であり、結果の解釈に十分に留意する必要がある。

結論:

産後の母親の泣いている子どもに対する度重なる無反応は、子どものコミュニケーションの発達をはじめ、乳幼児期における神経心理学的発達の遅延と関連することが示唆された。今後は、子どもの発達の可塑性を考慮しながら、ネグレクトを受けた子どもの神経心理学的な発達軌跡について詳細な検討を行っていく必要がある。